

## 大会運営面・技術面への提案

### 1 はじめに

私は1987年第1回石垣島ファミリートライアスロン大会に家族旅行として訪れ、父と弟の3人でリレーの部（SWIM担当）に出場して以来、選手として現在もトライアスロンを楽しんでいる。ケガによる脚の手術でリハビリを余儀なくされていた1998年頃に審判員を目指したきっかけは大した理由もなく、周りの流れに任せて取得していた。しかしその後すぐ転機が訪れた。雑誌に掲載されていた「奄美レディストライアスロン大会」の“女性だけの審判団の活躍”を読んだことだ。審判員活動自体にそれほど興味があつた訳では無かったが、やってみたいという衝動に駆られて所属協会の当時の技術委員長に直談判して、その年の奄美レディ大会に審判員として参加することが叶った。

全日本女子エイジ選手権の冠を狙うこと以外に奄美大島に訪れる自分がとても不思議な感覚だったが、はじめての審判員会議や運営面・技術面の会議などがとても新鮮で、難しいことも全てがとにかく楽しかった。それ以来、もっともこの経験を地元でも生かしたいという気持ちに繋がり、いつのまにか日常の大半がトライアスロン一色となるほど、審判員以外の活動も協会の裏方として関わっている。当時の技術委員長の粋な計らいと思いやり、駆出しの私を応援してくれる環境の幸運に恵まれたおかげで好調な第一歩を踏み出したことを心から感謝している。

審判員としての活動は地元・圏内大会には毎年携わってきた。ここ数年は総務的な役職が多くなってきているが、私自身の最高の責務として挙げられるのが、念願であった審判長を務めることになった2010年大阪国際トライアスロン舞洲大会と（以下舞洲大会）2005年KIDSトライアスロン浜寺公園大会である。直接的な現場での審判業務から離れて、間接的な役職を務めることが多くなっていたが、審判長を任された際には戸惑いながらも、運営全般におけるコーディネータ的な業務も含め、全ての事について確認し把握し納得のいく結果が得られるように自分なりに努力した。そういった意味では、全責任を担う重要な役職ではあるが、やりがい感もあった。“コーディネータ”というのは、審判員・スタッフの配置に関することを主に指すが、それ以外の部署においても配置に関しての配慮が必要だと常々感じている。

そこで、最近の私自身の活動背景から経験したコーディネータ的な業務を念頭に、上記の両大会での事例に基づき見解と展望を述べながら考察したい。

## 2 大阪国際トライアスロン舞洲大会に関して

### 1. 競技運営体制

審判長は、主催者、各審判員、その他各パート、選手に対して競技を取り仕切る中心人物である。大会当日の最高責任者として全ての管理を専任する。審判長が事前に各パートの配置を考えパート毎のミーティングを設け、審判長の顔を覚えてもらいそしてお互いに信頼を得て円滑な競技運営が図れる体制が整えば、理想的である。スケジュール管理や業務ごとにマニュアル及び救護フローチャートを作成し、問題点の洗い出しと解決策を事前に討議し、全ての審判員の意識を同じ方向に向けることは能率を高め、大会当日の業務がより円滑になる最善の方策であると考えている。

これらのことは一般的に認識されていることだが、実施には難しい。事前ミーティング開催については、個人個人の物理的・日常的な時間的な余裕が取れないこと、また競技上

の特性としても3種目の立地的な条件も加わり、理想どおりの機能を求めるには難しいという現実があるからだ。

全体の運営体制としては、人員不足もあり大阪府以外から近畿圏内の審判員を総動員し、また「社会貢献活動」の一環として企業・専門学校からの一般ボランティアを100名弱活用している。これらの要素をふまえると、完璧な業務遂行にあたり困難を要することは想定内ではあるものの、現実的にはかなりの労力を要する。

そして配置を考える際に3種目のパート以外にも重要なパートとして、スタート、フィニッシュ、セクレタリー関係を担当する審判（スタッフ）が必要だと考えている。そこにもっと着目して充実した環境を構築したい。たいていはこれらを管理し確認する担当者は近隣パートの審判員であったり、セクレタリー関係の一切に関しては本部が一括して担当している。私の力不足もあるのだが、当日の動きには非常に物足りなさを感じた。

これらの点も、パートとして独立させた配置を考え生かされるべきだと感じる。例えばセクレタリー関係として、小さな質問から公的な文書関係の質問に至るまで、あらゆる情報が集積されそれを周知している審判員（スタッフ）が限られているため、業務遂行に何度も支障をきたしていた。

審判長を任されている以上、当日の動ける範囲と責務は限定されている。より事前準備の重要性を感じ、全てをこなせなかったことに対して、運営体制の再考を次回へ生かしたい。

## 2. 大会趣旨と関連事項

舞洲大会では数種類の冠が付与している。

①JAPANカップのシリーズ戦②大阪府国体予選（近畿圏内他府県含む）③日本選手権近畿ブロック予選会④大阪府選手権⑤近畿ブロック選手権⑥大阪府民体育大会  
以上、年度毎に増減はするものの、ほぼ近畿圏内の主要な冠はここに置かれている。

また、選手募集対象を見ると普及目的の要素も含まれている。

①オリンピックディスタンス ②スプリント ③リレー ④ジュニア（高校生）

そして、ローカルルールとして設定されているスキップ導入制度も挙げられる。

その他、地元盛り上げイベントとしてコラボレーションしている幼児・小中学生によるチアリーディング団体も招き、3回の公演を組み込んでいる。

トップレベルの選手と一般選手・地域団体が参加することにより大会に色を添えている大変欲張りな大会である。同時に選手の意識の違いもある上、競技ルール、マナーの周知不足は計り知れないとも言える。

JAPANカップのシリーズ戦としての審判長の責務には、当然管理・把握し専任しなければならない業務がある。しかし、連絡と情報交換の不足により、特に競技説明会直前になって、スタンスの違いによる不備が顕わとなった。要らぬ気遣いが情報交換不足という悪い方向に向いてしまったが、JAPANカップの主権者には、運営スタンスを地元競技団体に対してもう少し配慮のある対応を要求したい。マニュアルが無い上でスタンスの統一化を望むのであれば明確に周知すべきである。

以上のことから、地元競技団体としての大会趣旨は普及目的も打ち出したい上、どのようにこの都心型大会を興味と魅力のある、安全で公平な大会として運営するのか、この大会の位置づけについても改めて深く考えねばならない。

## 3. 審判員の人材確保・技術レベルの向上

この舞洲大会においては各パートにさらに細かく部署毎に分割してポイントチーフ審判員を置いた。業務を遂行する上で、ポイントチーフ審判員自らが責任感を持ち積極性が

生まれ、独自の良さが発揮された。チーフには、各パートの業務周知と必要な備品や立ち位置に至るまでの一切を任せる。ポイントチーフはさらに各要所で、旗の振り方・タイミング、笛の吹き方・タイミングに至るまでを指導・指示を任せることで、改めてどのようにすべきなかをミーティング時に全員で知恵を出し合うことができた。

しかし、結果としては事前ミーティングに全てのチーフが集まった訳ではなく、周知統制がしっかりできなかつたため、終了後には審判員から多数のクレームが出た。どちらかと言うと、審判員・スタッフへのケアに労りが足りなかつたという結果が招いた類であった。細部を見渡せば競技的な問題点、ルール違反や取締りに関する事項もあったが、この大会のためだけに集まったボランティアや審判員に対して配慮のある円滑なコーディネートができなかつた。先にも述べたことと重複するが、審判長としての当日の業務は限られているので、事前準備段階での不足があったと反省している。

#### 4. 問題点と改善例（案）

審判長という立場でどこまで関与すれば良いのか、私だけが理解できていないのかも知れないがあまりにも業務が多岐に渡り、何もかもが物足りない感覚のまま終了してしまった。

##### ・審判団全体へのフォロー

（競技進行の把握とチーフ事前ミーティングの必修）

（選手に対するフォローと同等に捉え要項や案内を配布し、簡略化しない）

選手と同じく、審判員・スタッフにも大会の趣旨・コース特性・スケジュールを把握し理解してもらうことは、意識の統一に繋がる根幹である。特に想像以上だった点は、自ら志望して参加したにも関わらず長時間の拘束感を感じ、早く帰りたいという意識に対してだった。これについては、あまりにも壮大な問題点であるため、まず選手と同じように大会趣旨を理解してもらうところから手掛け、この大会への審判運営に対する責任感を持ってもらえる工夫が必要である。選手への配布物は大量にあっても、審判員・スタッフには簡素なものしか無い現状は改善していきたい。またこの大会への愛着と愛情を持ってもらえるように促したい。ボランティアへのケア、フォローを専属する配置にも取り組んでみたい。

また、本大会には付与する様々な冠が示すとおり、協力しているパートナーが多岐に渡る。そのため、円滑な業務遂行にあたっては、審判団統制の問題以外にも含まれており、それぞれの意識の統一が求められると感じる。改善していくには時間を要すると思われるが、少しずつ手掛けていきたい。

##### ・本部に殺到する質問選手

（出場選手マニュアルの作成（HP掲載））

競技説明会が当日のスタート直前数十分前にしか行なえない現状を懸念していた。不要だと半信半疑で作成したが、かなり役立っていた。一般出場選手の当日の流れに沿って事前準備、受付、スタート、フィニッシュまで図解を添えたマニュアルを作成した。必要な備品も詳細に記し、チェックリストも添付した。このことでウエットスーツの必着義務や競技説明会出席の必要性等が伝わり、多少の改善に繋がった。HPを見ない選手に対しても対応できるようにしたい。

##### ・救護搬送経路、連絡網のフローチャートと救護される選手について

（軽自動車を3台用意し導線と運転者を配置）

（研修会開催の必要性）

現場での決定事項となったが、予想を超える搬送者が出たためフロチャートの再考と通信不良もあった無線機の新調が急務である。

また、選手自身が「倒れる」ことへの美意識があるようにも感じた。むやみに倒れている選手も少なからず見受けられ、選手としての意識改革を促す何等かの方法が必要なのかも知れない。例えば、シーズン期を外してメディカル委員やJTU公認指導者からのコンディショニング研修等を開催して、学習する機会を設けることも提案したい。

#### ・スキップ選手の対応

(具体的な例を想定し事前に予習・討議)

SWIMとBIKEの2種目において、体調不良等により自ら距離を短縮した場合のスキップ制を導入した。あいまいな定義について討議改善し明瞭化した。これらの点を各チームと審判員そして選手へ周知した。大きな問題も生じず、スキップ希望選手も無事にFINISHした(リザルトは参考記録)。

### 3 KIDSトライアスロン浜寺公園大会に関して

#### 1. 競技運営体制

この大会では、ほぼレースディレクター補佐として総務を務めている。そして一昨年2009年度から私の審判員活動の原点ともいえる「女性審判団」を結成した。私自身は総括審判として付き、全てのパートチーフに女性を起用し、男性陣はサブチーフとして手堅く支えてもらう運営体制を築いている。お揃いのユニフォーム(Tシャツ)まで作成する経緯に至り、意思統一と協力体制の素晴らしさは全国のどこにも負けないのではないかと自負している。この体制としては、まだ2回大会を経験しただけではあるが、昨年度からの新技術委員長の理解と愛情そしてアドバイスを頂きながら、全女性審判員が奮起できる環境を整えて頂いている。

コースは3種目全て公園内で行い、立地条件としても範囲が限定されるため競技進行も把握し易い。審判員同士の情報交換も行き届く点では、問題はない。

#### 2. 大会趣旨と関連事項

対象は小学1年生から中学3年生まで、初心者からトップレベルの子供達が出場している。大阪府知事・教育委員会、地元の市長・教育委員会賞も授与される。

地元盛り上げイベントとして、幼児・小学生のチアリーディング団体を招き公演を組み込んでいる。また、ゲスト選手として大阪府で活躍しているプロトライアスリートや元トライアスリートで現役競輪選手も招き、大会の随所で起用してふれ合いの場を設定している。また、子供達のレース直後に開催している父兄(応援者)によるアクアスロンレースも組み込み、大人気となっている(有料)。

“夏休み最後の思い出に“のキャッチフレーズの示すとおり、初めてトライアスロンに挑戦する子供達を念頭におき、分かりやすい運営を目指して各部署で準備をしている。これらは各パートチーフから提案されたものを前日ミーティングにて討議し採用している。

例えば、数分単位に出走するBIKEコース試走では、危険箇所や安全走行を促しながら審判員に先導されて行なっている。TRエリアでの動きを「紙芝居風」にして説明をしたり、スイムスタート前にはしっかり準備体操を審判員の指示で全員で行なうなどしている。手を出しすぎる父兄には注意を促すものの、父兄がコース誘導を手伝ってくれたり、危険注意喚起を積極的に行なってくれる光景さえ見られる。

これらのことは、女性審判団だからこそ見守ってもらえている効果なのかも知れない。

### 3. 審判員の人材確保・技術レベルの向上

女性の起用には周りの不安視もあったが、本人への承諾への厚い壁が難題であった。どの女性も選手経験があるものの審判員としてチーフを担うことには消極的であった。不安を解消するためにその内容を聞き取り、解決の道筋を一緒に考え、必要であればサブ要員を確保し、そのような段取りを順を追って地道に積み上げていった。

男性審判員・スタッフの存在も有意で、不安な女性チーフを影となって暖かく支えてもらえる為の彼等への努力も怠ってはならないと考えている。

各パートチーフの女性以外の審判員募集はクラブチーム単位に呼び掛け、この体制で数年が経過している。現在では、クラブチームの年間行事の一つとなっていたり功を奏している。5年以上継続協力いただいたクラブへは感謝状を授与し、その功績を広くPRさせてもらった。また、ゲスト選手を通じてトライアスロン以外の競技団体からの応援協力も得られることもあり、100名近いスタッフが即集結される。

この体制が築けるに至るまでには、地道な呼び掛けを重ねた結果でもあるがスタッフ要項を充実させて、全審判員・スタッフに対して大会の要項・趣旨・コース特性・スケジュール等を理解し把握してもらえよう、配慮と準備をしてきた成果も大きいと感じている。

審判員資格を有していないスタッフも多いこともあり、笛を吹くことに戸惑いがあり要所で吹けなかったり、大きな声を出すこと、拡声器の使い方、旗を振ること、些細な行動においても、練習と指導が必要であると見受けられる。またこれらのことを行なうことで、審判員になりたいという目標に繋がる気配も感じられる。

### 4. 問題点と改善例

・無線機使用時には会話が多く、急務な事象に滞りが発生した。また全く自信が無くて使用できない審判員も多数いた。

(シナリオの作成、シナリオ以外の必要事項の喋り方(発声)の練習・指導が必要)

簡単に練習してはいたものの現場に立つとその勇気が出せないことが判明。競技での情報が本部・審判長に集中されるよう、今後も努力したい。

・TRで高位置に掛けられたBIKEの取り外しの介助についての定義

(事前討議により、競技に影響しない範囲内で行なうことで合意)

設営上、ロープを使用した対応策を取るものの、審判員の介助はOKとしているが、介助の巧みさでタイムに大きく影響してしまうことは否めない。特に定義を設定する必要はないかも知れないが、このことが競技に影響してはならないことを認識する必要がある。

・式典欠席の要望

リザルトを早く教えて欲しいという理由が、特別な用事でなく式典まで待つのが面倒だという父兄が多数いる。また式典に息子(娘)が関係ないなら即帰宅したい、などの理由が目立つ。よし悪しの判断は難しいところだが、今日1日を大会の最後まで楽しんでもらえるような創意工夫を凝らしたい。

(父兄(応援者)の“パパママアクアスロン”大会の実施)(地元チアリーディング団体の公演)(ジャンケン大会)等々がその改善例の一部でもあるが、例えばゴミ拾いや撤収作業といったことにも着目すれば、この大会を選手とスタッフが最後の最後まで一体となって創り上げているという達成感に繋がるように考えられる。まだまだ思いは尽きないが、今後の課題としたい。

#### 4 おわりに

年間における私自身の最も行動的な活動は、日本選手権の協力審判員として参加していることである。日本最高峰の大会の運営体制を目の当たりにすることは、本当に興味深く楽しい。全国の審判員の方々とお会いできることは同窓会に匹敵するほど心待ちにしている思いもあるが、最大の理由は審判員としての行動や考え方、運営の方法などを身近で感じることができ、地元では味わえない充実感が沢山あることだ。情報を共有しあい議論しあうことで、様々な視点からの対応案を学ぶことができる。

これが何故だろうと考えた時、運営全般のことを考える必要がなく審判員としての業務に専念できる環境を整えて頂いているからこそその充実感であることが、普段の自分の経験から痛感している。そのことが非常に新鮮で、楽しくて、もう10年近くも継続参加している。また全国に出るからこそ自分の未熟さも確認でき、今後も機会を作ってこのような経験をさらに積んでいきたい。

そして、何よりも自分の所属する地元でのトライアスロンの普及と発展を望んでいる。私も関与して開催して7年目を迎える月1回の協会主催のランニング練習会には、協会会員の初心者の方々が多数参加し、この1年間においては毎月15名近くで賑わっている。1種目のみの練習会にも関わらず、親睦も深まり私たちが学ぶ場面も多数ある。選手と触れ合うことで常に生の声を聞き、何を求めているのか新しい情報を察知できている。これらを踏まえて、審判員としての力もつけこれからも貢献できるよう変わらずに継続していきたい。